

30. 急性期と回復期のリハスタッフの疲労度の違いについて

済生会吉備病院リハビリテーション科

○ 小寺 剛志

【はじめに】

近年の健康保険制度の変化によって急性期病院と回復期病院では、発症からの期間・平均入院日数など医療環境に明瞭な差が生じている。演者の所属する医療法人では、療法士は急性期病院と回復期病院間で定期的な人事異動が行われており、各部署における疲労特性を明らかにすることで職員の健康管理に役立てることが今回の調査の目的である。調査は、疲労や心身の違和感に関する自覚症状調査法である「蓄積的疲労徴候インデックス」(以後、CSFI)¹⁾と、職場の心理的ストレス要因とその影響を判定する「職業性ストレス簡易調査票」²⁾を組み合わせ実施した。³⁾

また、勤務状況を把握するために24時間の労働と休養の時間的バランス¹⁾の調査も実施した。

【対象と方法】

調査対象：A 総合病院（病床数 553 床）に勤務する理学療法士 9 名，作業療法士 3 名，言語聴覚療法士 2 名 合計 14 名（男性 9 名・女性 5 名，20 代 9 名・30 代 4 名・40 代 1 名，経験年数 3 年以下 9 名・10 年以下 4 名・20 年以上 1 名）と，B 病院に勤務し回復期病棟（病床数 40 床）患者を担当する理学療法士 6 名，作業療法士 6 名，言語聴覚療法士 2 名 合計 14 名（男性 3 名・女性 11 名，20 代 12 名・30 代 1 名・40 代 1 名，経験年数 3 年以下 9 名・10 年以下 4 名・20 年以上 1 名）。調査期間は平成 22 年 7 月 16 日から 8 月 10 日。調査方法は「蓄積的疲労徴候インデックス」「職業性ストレス簡易調査票」および 24 時間の勤務・生活時間状況を，無記名自記式質問紙によるアンケート記入方式で行い，回収は留

置式とした。アンケート記入は，交代勤務による勤務条件の変動を避けるために，前週の勤務日数が 5 日以上週の週で，同時に前日が休日ではない日に実施した。分析方法として，CFSI を用いて病院別に各特性の平均訴え率を算出し，基準平均訴え率及び 70%タイル値と比較した。職業性ストレス簡易調査票を用いて，病院別の各項目の平均値を算出し，全国平均値及び各部署間での比較を行った。24 時間の勤務・生活時間状況では時間的バランスを評点化しその歪みの程度を病院別に比較した。調査対象者に対しては，今回アンケート結果は本研究以外には用いないことを説明し同意を得た。

【結果】

1. CFSI

A 病院では 70%タイル値付近が 1 項目，平均付近かそれ以下が 7 項目なのに対して，B 病院では 70%タイル値付近またはそれ以上が 5 項目であり，「労働意欲低下」のみが平均以下であった。B 病院リハスタッフは A 病院スタッフと比較して全般的に疲労度が高く，特に精神的側面の疲労度が高いことが示唆された。

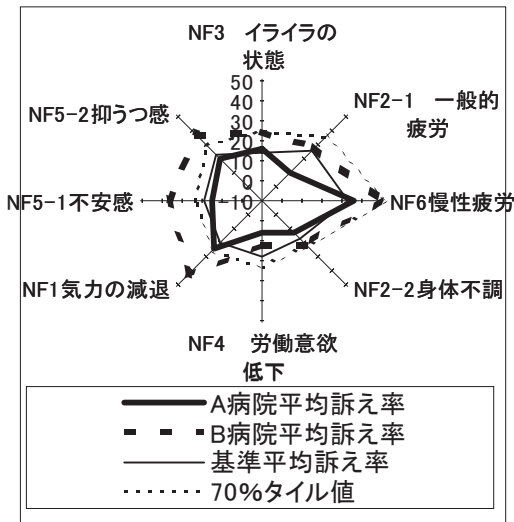


図1 急性期・回復期病院の CFSI
2.職業性ストレス簡易調査票

表1 職業性ストレス簡易調査表結果

	平均	A 病院	B 病院
仕事の 量的負担	8.7	8.6	8.6
仕事の コントロール	7.9	8.1	8.2
上司の支援	7.5	8.3	9.9
同僚の支援	8.1	8.1	10.2

両病院とも仕事の量的負担・仕事のコントロールは平均値に近く、A病院では上司の支援は平均より高かった。B病院では上司・同僚の支援が平均より著明に高かった。

3. 24時間の勤務・生活状況

表2 勤務・生活状況評点

	A病院	B病院
平均評点	2.3	2.3

24時間の労働と休養の時間的バランスについて両病院とも歪みがない状況と判断される。

【考察】

A病院はCFSIでは蓄積的疲労が低く、これは短期間で患者の状態に変化が生じやすい為、

療法士は達成感を得やすく自覚的疲労感の軽減に繋がっている可能性がある。B病院はCFSIでは「労働意欲低下」を除き全体的に蓄積的疲労が高値であった。職業性ストレス簡易調査票では「仕事の負担量」「仕事のコントロール」は平均的で、勤務生活時間にも歪みはないことから、回復期病棟特有の職務の性質に疲労蓄積の原因があると考えられる。回復期病棟の患者は退院先や退院後の生活スタイルが多様性に富み、リハスタッフの職務はそれに深く関与する。その一方で、20代で経験年数の浅いスタッフが多数を占めるため、全般的に蓄積的疲労がみられ、特に精神的疲労項目に著明な高値が生じていると考えられる。また、「上司・同僚の支援」が著明に高値であり、それにより高い蓄積的疲労の中で「労働意欲低下」が防止されていると考えられる。

【まとめ】

CFSIを用いて調査した結果、急性期病院では疲労度は平均的で偏りは少なかった。回復期病院では、全般的な蓄積的疲労がみられ、特に精神的側面を表す項目は著明に高値であった。職業性簡易ストレス調査票からは、回復期病院では「仕事の負担量・コントロール」は平均的だが「上司・同僚の支援」が著明に高値であった。24時間の勤務・生活状況の時間的バランスは両病院共に問題なかった。

【参考文献】

- 1) 越河六郎,藤井亀:労働と健康の調和.労働科学研究所,東京,2002
- 2) 厚生労働科学研究費補助金労働安全衛生総合研究 下光輝一:職業性ストレス簡易調査票を用いたストレスの現状把握のためのマニュアル,2005
- 3) 中井夏子,阪脇礼子,石田弘美,三上剛人,白土瑞江:救命救急センターにおける看護師の蓄積的疲労の特性とその原因,第37回日本看護学会論文集(成人看護I),2006; p 235 - 237